

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

空爆と「復興」：アフガン最前線報告

中村，哲、ペシャワール会 編著

アフガニスタンからの発言 中村哲
(1/4、2001年)

<http://hdl.handle.net/2324/4772331>

出版情報：空爆と「復興」：アフガン最前線報告，pp. 7-34，2004-05．石風社
バージョン：初版 2004-05-31
権利関係：©Tetsu Nakamura & Peshawar-kai Printed in Japan 2004
石風社より許諾を得て本文を公開しています。
公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



アフガニスタンからの発言 中村 哲

「対テロ戦争」の虚構

テロ事件三日後の九月一四日、外務省の勧告に従ってアフガニスタンを離れ、一時帰国した私にとって、日本中が熱病にかかったような「正義のアメリカ」対「悪の権化タリバン」という構図は、まったく理解しがたいものだった。

大旱魃^{かんばつ}のなかで労苦をともして水を得、喜び合った村の人々。人なつこい顔をして井戸掘りを手伝ってくれたタリバンの兵士たち。日本で報道されている「アフガニスタン」は、現地で接し、見聞きしたわがアフガニスタンとはあまりにも違うのである。

私が主にハンセン病患者の治療のために、アフガニスタンと国境を接するパキスタン北西辺境州の州都ペシャワールの病院に赴任したのは、一九八四年のことだった。七八年、テイリチ・

ミール遠征隊の同行医師として足を踏み入れたことのある私にはなつかしい地であった。

ところが、赴任してみると、猖獗^{しょうけつ}をきわめていたのはハンセン病だけではなかった。マラリア、腸チフス、結核、 Dengue 熱といった感染症の病気が流行し、そのために治療の範囲も地域も広げざるをえなかった。

そのきっかけは、二〇〇万人の死者と六〇〇万人の難民を出した七九年からのアフガン戦争であった。私が赴任したころは戦争が最も激しいときで、アフガニスタンから続々と新たな患者が流れてくるために、いくらパキスタン側で治療しても埒^{うち}があかないのである。

以来一七年、パキスタン北西辺境州のハンセン病根絶計画に始まり、アフガニスタン東部における無医地区山村の医療モデル創設をめざす私たちの無料診療活動は着々と成果をあげてきた。

九八年には PMS（ペシャワール会医療サービス）基地病院をペシャワールに建設、パキスタン山岳部に二ヶ所、アフガニスタン東部山村に三ヶ所の診療所をもち、現地スタッフ一五〇人、日本人ワーカー五人による診療患者は、移動診療を含めると年間約二〇万人にのぼるまでになっていた。

そこに降りかかってきたのが、一昨年（一九九九年）来の大旱魃であった。異変に気づいたのは二〇〇〇年五月。アフガニスタン北東部のドラエ・ヌール診療所付近の地域で細菌性の赤痢が大流行し、ひどい脱水症状と栄養失調で子供たちが次々と命を落とした。原因は極端な水不足だった。

大旱魃の原因は異常気象であつた。一昨年から昨年にかけてヒンズークッシュ山脈に降る雪が一〇〇年に一度といわれるほど異常に少なく、そのために川の水位は下がり、国中の井戸が涸れた。

中央アジア一帯から北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）を襲つた大旱魃は、モンゴルや北朝鮮については日本でも大きく報道され、食糧援助も行われているが、アフガニスタンの被害ははるかに甚大で、当時、WHO（世界保健機関）が「四〇〇万〜五〇〇万人が飢餓線上にあり、一〇〇万人が死に瀕している」と警告を發したほどだった。

少々の飢饉でも飲み水があれば人間は生きられる。病人は命があれば治療できる。しかし、水がなければ生きられない。このままでは国が壊滅してしまう！ ともかく水を確保することだ！ こうして私たちペシャワール会は昨年（二〇〇〇年）七月、本来の目的である医療奉仕活動のかたわら、全力をあげて水源の確保に乗り出した。

水を確保する方法は、既存の井戸を再利用する方法、新たに井戸を掘る方法、カレーズ（灌漑用地下水路）を修復する方法——といくつかの方法がある。

そのなかで、私たちがいちばん力を入れたのは井戸を掘ることだった。それも手で掘るといふいちばん伝統的なやり方で、である。

川沿いの地域は掘れば水が出やすいし、川沿いにはだいたいの道路がついているから、ボーリングもしやすく、削岩機やダイナマイトも使いやすい。だから欧米のNGO（非政府組織）は競つ

て掘りたがる。

だが、本当に困っているのはそうした地域の人々ではなく、幹線道路からはずれた村の人たちなのである。大型機械など調達できるはずがなく、そもそもトラックが入れるような道がない。私たちが取り組んだのはそういう地域だった。

試行錯誤の結果、いちばんいいのは地元のやり方に従うことだった。地元の人たちの力の及ばないところを、私たちがつるべを改良したり、岩盤や巨石に突き当たったときにそれを爆破したりするのである。

それから一年余、アフガニスタン東部一帯で私たちが手がけた現場は六五八ヶ所、そのうち今年（二〇〇二年）八月までに三八〇ヶ所で完成をみている。それによって一二八ヶ村、二五万人の流民化を防ぎ、なかにはカレーズの復旧によって砂漠化を阻止し、難民化した全村の人たちが帰村できたこともある。医療スタッフとは別に水源確保のために動員したスタッフ・作業員は約七〇〇人、一NGOとしての規模をはるかに超えていた。

欧米のNGOのなかには、自国の国内向け宣伝としか思えない「援助活動」もあった。井戸を千本掘ったと宣伝しながら、じつは既存の井戸にポンプを装着するだけのプロジェクトだったり、極端な例になると、ポンプだけつけて井戸を掘らず、写真だけ撮って帰って行ったという例もある。

そうしたなかで私たちは、地元の人たちと力を合わせ、必死に取り組んできた。その結果、現

地の人々の大きな信頼を築き得たと思う。

しかし、山村の崩壊は進む一方だった。早魃で村そのものが壊滅すると、大都市部に避難民が集中し、こんどは大都市が巨大な無医地区になる。――放置しておけば彼らは隣国に逃げざるをえない。そうなれば救援資金がさらに必要になるだけでなく、膨大な犠牲者を出す。さらには隣国パキスタンやイランをも大きな混乱に巻き込むことになるにちがいない。いまいけばん大事なことは難民を出さないことだ。

そこで私たちは、バーミヤンの仏像破壊などの騒ぎによって大半の欧米NGOが撤退あるいは活動を休止するなかで、今年（二〇〇一年）三月、避難民の流入と外国団体の撤退で巨大な無医地区と化した首都カーブル市内に五ヶ所の診療所を開設し、九月には同市内にさらに五ヶ所の診療所を増設するとともに、水源確保事業を年内に一千ヶ所に拡大することにしたのである。

九月一日に起きたアメリカでの同時多発テロは、その直後の出来事だった。

私たちが水源確保の事業を始めたときは、いずれ大規模な国際援助が始まることを信じていた。それまでは私たちが頑張ろうと――。

ところが、今年一月から始まったのは、援助どころか国連制裁だった。国際社会は、二二年間にわたるアフガン戦争と内戦で疲弊しきり、大旱魃によって死に瀕しているアフガニスタンを見捨ててきたばかりでなく、食糧を含む制裁まで課したのである。それが今回の石仏破壊事件につながったかどうかは別として、タリバン政権を含めて現地の感情がいきよに硬化したのはそれ

からだだった。

いま一般の人々は、ビンラディンと自分たちが結びつけられていることに合点がいかないであろう。繰り返すが、何百万人もの人々が飢餓線上にあるのである。にもかかわらず、助けてくれるどころか、ビンラディンが潜伏しているというだけの理由で、なぜ世界中の大国から攻撃されなければならぬのか。

タリバン政権といっても、日本でいわれているような「ひと握りの圧政者」対「民衆」という図式は成り立たない。アフガニスタンの権力の基盤は各地域の「ジルガ」（長老会＝伝統的自治組織）にある。その代表者、またその代表者というかたちで階層的により大きなジルガがつくられ、大事な決定はそこで行われる。タリバンを受け入れるかどうか、そうしたジルガで決められたもので、人々の平和を求める声が政権を支えてきたのだ。

九四年に結成されたタリバンは、九六年にカーブルを陥れ、いまでは国土の九割を支配している。民衆の支持がなければ、わずか一万五千の兵力で、一〇万のソ連軍でさえ制圧できなかった地域を制することなど不可能である。

極端な報道になると、タリバンが報道管制を敷き、情報をコントロールしているからだという。だが、それもありえない。一般の人々が聞いているのはイギリス・BBCのパシウトウー語放送である。

私はいま民衆レベルで、世界で最も冷静にことを判断しているのはアフガニスタンの人たちだ

と思っている。かたやBBC放送を聞き、さらに現実に行き起きていることを自分自身の目で見ているからだ。その意味では、結果的に情報をコントロールされているのはむしろ日本人のほうがであろう。メディアが流す情報はアメリカの情報であり、アフガニスタンのニュース・ソースはかぎられた一部の軍閥（北部同盟）なのだ。

テレビで何度も流される公開処刑のシーンなどから、タリバン政権は鬼や悪魔のように思われているかもしれないが、じつはそれ以前に支配していた諸勢力（現・北部同盟）による市街戦、婦女暴行、略奪は日常茶飯事で、カーブルの街は三分の二が破壊され、市民はおびえながら暮らしていた。

見せしめの刑によって治安を保っているという面もたしかにあるが、タリバン政権になってから、アフガニスタンはおそらく世界一治安のよい国となった。そういうことが日本ではまったく知られていないのだ。

数百万もの人が餓死の危機に瀕しているというのに、それは伝えず、風習や風俗の類いに属する面だけを取り上げて、しかも西洋近代社会のルールや価値観に当てはめてうんぬんする。これは物事の本質より話題性のある事柄を好んで伝えるというジャーナリズムにも問題があると思うが、「人権」というなら、ではアフガニスタンの人々の「生存権」についてはどう考えるのだろうか。

ちなみに「ブルカ」（女性が頭からかぶる外出着）はアフガニスタンだけではなく、ペシャ

ワールの女性も着用している。タリバンの布告する法はほとんどが地方の伝統的慣習なのである。さらに怖いのはイスラム原理主義に対する誤解である。原理主義というのは教義の原点に帰ろうという一種の純粹主義であり、どの宗教にも原理主義はある。キリスト教でいえばピューリタン（清教徒）運動がそうであり、原理主義そのものが政治性や攻撃性を帯びているわけではない。にもかかわらず、うっすらとではあるが、イスラム世界というのは原理主義とテロの巢窟である。というような認識ができつつあるのはきわめて危険な誤解である。

ところで日本の対応だが、何事も重要事を決定するとき、まず必要なのは正確な現実認識である。ところがアフガニスタンに関しては、日本が独自の情報なしに動きだそうとしているのに驚く。「主體的に判断する」といっても、それは根拠ある情報あつての話であり、私から見れば、日本はほかの国からの情報によって踊らされているようにしか見えない。

もし私が首相なら、何をおいてもアフガニスタン国民への大規模な支援を実施する。この冬、カーブル市民の一割が餓死するだろうといわれている。カーブルに住む一〇万〜一五〇万人のうち、その大半が水も食糧もないなかで周辺の農山村から逃れてきた早魃避難民なのである。

これは本来、WFP（世界食糧計画）の仕事であるが、WFPとしては、国連が正式な政府として認めていないタリバン政権を相手に、まともな援助活動をすることはむずかしい。また、アメリカが空から食糧を配布しているといっても、空爆しながらでは意図が見えすぎている。それでも効果があるならまだしも、人々は気味悪がり、大半は焼き捨てられた。

私はそこに日本の出番があると思う。というのは、これは中東や中央アジア全般にいうことだが、とくにアフガニスタンではタリバンを含めて対日感情がきわめていいのである。日本を知らない人はなく、日露戦争や「ヒロシマ」「ナガサキ」はだれでも知っている。

アフガニスタンと日本は、より大きな歴史的視点で眺めると、類似点がある。日本はいまでもそG7（主要先進七ヶ国）の一員になっているが、近代国家として出発し、一人ひとりに日本国民としての自覚が生まれたのは明治維新によつてであつた。その要因はいうまでもなく外圧であり、ロシアという北からの脅威と欧米勢力という南からの脅威のサンドイッチ状態という危機感のなかで、国家・国民としての同一性が生まれたわけである。

アフガニスタンも同じような構図にあつた。北方ではトルコマン諸部族が帝政ロシアの防波堤になり、南方ではタリバンと同じパシュトゥン族がイギリスの侵略を退ける。「アフガニスタン」という国の同一性はそういうかたちで形成された。そうした政治的背景からしても、経済力からしても、何らの利害関係なしにいま彼らを助けることができるのは日本しかない」と述べても過言ではない。

暴力に対して暴力で報復するのではなく、少なくとも人が餓死するような状態を解消しなければテロは根絶できない。人間は追い詰められれば悲壮になる。集団として追い詰められれば、自分の命を犠牲にしても集団を守ろうという気持ちになるものである。

実際、暴力革命の多くは飢餓状態のなかから起きている。飢えている人々に何より必要なこと

は、十分に食べさせ、まっとうに働けるようにすることである。

最後に、私たちは、WFPの活動が本格化するまでは、との思いで二〇〇一年の一〇月から食糧配布のための事業「アフガニのちの基金」を開始した。

それは、この冬、餓死の危機に直面すると推定される一万家族（一〇万人）の「生存権」を守るものである。「一口二千元」で募金をお願いしているのは、日本円で二千元あれば一家族（一人）が、小麦粉と食用油で一ヶ月間、命をつなぐことができるからだ。

私たちの活動が停止すれば、戦慄すべき事態となることは目に見えている。そのとき犠牲になるのはまず子供たちであり、お年寄りである。

平和の維持には戦争より勇氣と忍耐が要る。アメリカの攻撃が本格化しているが、私たちは不退転の決意で世界の良心に報復回避を訴え続け、今後とも粘り強く支援活動を続けていく。

（2001・12）

報道されないアフガンの真実

八四年、私はNGOの医師としてパキスタン・ペシャワールに赴任しました。そしてその後今日に至るまで、一七年間にわたって、パキスタンとアフガニスタンで医療活動に従事しています。ですから私の場合、九四年に突如出現し、九六年に政権をとったタリバンよりもアフガンについては古参なのです。

それにしても過去一七年間のアフガン体験で経験したことがないほど不気味な静けさだけに、これほど激しい反米感情を感じたことはありません。理由は簡単です。現地の人々にとって、今回のアメリカによる空爆は「理不尽な攻撃」以外のなにものでもない。いかにアメリカが正当化しようとも、彼らにとっては、そのように映っているのです。

タリバンについては、それこそ洪水のような報道がされています。しかし、その内容というところ、あまりに一面的といいますか……。狂信的な部分だけが報道されて、一種のカルト集団の扱いです。これにはびっくりしました。

実際のタリバンは理解不能な狂信的集団ではありません。もちろん、おかしい部分もありますが、ごく普通の人間集団でもあります。

タリバン政権は、いつてみれば非常に古風な農村社会を代表する「田舎政権」そのものなのです。今回のテロで見せた組織的な動きなんて彼らには到底できません。現地の人ほとんどは読み書きすらできないのですから。

ただ、今回のアフガニスタンをめぐる状況についていえば、彼らの情報判断は非常に正確です。一部に、アフガニスタンで報道管制が敷かれているとの報道もありますが、実際には、現地ではBBCパシトゥー語放送によってかなり正確な情報を得ている。バイアスのかかった報道に冒された日本人より、はるかに事態を把握しているといえるでしょう。

タリバンの一部がビンラディンに協力していることも承知の上で、「彼は掟として守るべき客人ではあるけれども、迷惑だ」というのがタリバンの大部分を含めたアフガン人の一般的な受け取り方です。ビンラディンに巻き添えを食って、何の罪もない自分たちが世界中から標的にされるのは、理不尽以外の何ものでもないのです。

八九年のソ連撤退後、ナジブラ政権を倒したラバニ、マスードらのムジャヒディン（イスラム

武装勢力）は、九二年にカーブルを占拠し暫定政權を打ち立てました。しかし彼らは統治能力がないどころか、軍閥の内戦を激化させ、アフガニスタンを混乱に陥れました。

カーブル市内では、婦女暴行、拉致、襲撃、略奪婚などが横行していました。

殺戮もひどいものです。或る軍閥などは、市内にある小高い丘から大砲でハザラ族の住宅地を無差別攻撃した挙げ句、破壊させるなどの暴挙を繰り返して、数千名の市民が死亡しました。当時のアフガンは完全に無政府状態でした。特定の政治指導者のファンであることと天下国家の問題は次元が異なる。マスードであろうとタリバンであろうと、これはアフガン国内の内戦だという視点がない。

そんななか、突如現れたのがムラー・ムハンマド・オマル率いるタリバン（原義はイスラム神学生）だったのです。わずか一万五千名の兵力しか持たないタリバンが、わずか二年でアフガニスタンの九割を制圧するのはほぼ不可能と見られた。しかし、実現した。実際にタリバンの進駐に、国中が安堵した。民衆の平和への希求も背景にタリバン政權は成立したのです。混乱した無政府状態から脱するには、彼ら以外ないとアフガン民衆自身が判断したのです。

実態のタリバン政權はかなり融通無碍ゆうづうむげな一面を持っています。建前上、女学校は廃止されています。しかし、実際には隠れ女学校が存在する。産婦人科の医師や助産婦は必要ですからタリバン政府は見えて見ぬふりです。

民衆にしてみればタリバン政權のそうした矛盾は些細なことにすぎません。英米の支援で元の

暫定政権（＝現北部同盟）が戻ってくるほうがもっと困る。彼らが帰ってくるならば徹底抗戦するという姿勢は、決してタリバンが煽動しているものではないし、少なくとも北部の一部を除くアフガン人は、タリバン政権が崩れることを望んでいないのです。

現在のアフガニスタンは全体でみれば、兵農分離がない「中世期農村社会」に似ていると言えます。しかし、首都カーブルだけは、王族によって積極的に西欧化・近代化が推進された時期がありました。ソ連侵攻までのことです。

唯一の近代都市カーブルで、ミニスカートに代表される西欧文化を享受したのは一握りの富裕層、知識層です。しかし彼らはタリバンが来る以前に、動乱の首都から国外へ脱出してしまった。残されたのは西欧化の恩恵に与らなかつた貧民層、さらに農村社会から流れ込んだきた飢餓難民でした。

アフガニスタンの封建制にインパクトを与えたのは、ソ連です。皮肉なことに、ソ連が掲げた改革の綱領には、資本主義的近代社会に通じる男女平等などの人権策がふんだんに盛り込まれていました。それを伝統社会とまったく対立する形で押し付けたのは間違いでしたが、西欧型グローバリゼーションへ向かうひとつの露払いだったと言え言えなくはない。

ソ連共産主義の侵攻によって急^{せう}拵^しえの近代化に失敗したアフガニスタンにとって、グローバリゼーションとは、所詮アメリカを筆頭にした西欧経済主義・西欧文化主義の押し付けにすぎません。中世そのものといえる今のアフガニスタンの農村部には、マクドナルドやコカ・コーラに

象徴されるような経済グローバリズムが入る素地さえありません。整備された貨幣経済はなく、物々交換が存在する地域すらざらにあるのですから。つまり、アフガンとは田舎政権タリバン方式でなければ統治できない封建的中世農村社会なのです。

むしろ、グローバリズムは、タリバンが代表し、国の九割以上を占める農村ではなく、知識層や富裕層が住むカーブルこそ受け入れる素地があった。しかし、彼らは国外に逃げ、カーブルすら、貧困層があふれている。グローバル化の恩恵に浴する段階には到底至っていません。

加えてイスラム社会では、「儲ける」という商行為そのものが軽んじられる傾向があります。グローバリズムの根幹を成す資本主義経済そのものが否定的に捉えられているのです。そうした半ば自給自足の生活のなかに、突然、現金生活が入ってくる。そして金を持ったものが勝っていく。彼らに映るグローバリズムとはこうした姿です。

極端な例は、ロバやラクダの隊商がトラックの運送業者に対して反感を持つという構図です。トラックは農民にとっても便利ですが、それを享受できるのはごく一部。運送需要を拡大しようにも、農業一辺倒の社会には産業がない。結局、近代化の流れで出現した資本主義的特権階級の存在は、農民にとって許しがたい存在に映るのです。こうしたなかで、相互扶助的に成り立ってきた農村共同体が少しずつ崩れ始めている。この現実に対する反感、反動が強まっているのです。

アメリカに代表されるグローバリズムに最後まで抵抗するのは、近代的な経済基盤を持たない最貧国、アフガニスタンといえるのではないのでしょうか。

一方、文化のグローバリゼーションでいうと、人権活動家にとって最大の攻撃材料になっているのが、女性を頭からすっぽり包む、例のブルカです。

世界中から、女性差別の象徴のように糾弾されていますが、これはアフガニスタンだけではなくパキスタン北部にも見られる伝統的な民族衣装なのです。タリバンが無理やり被せたというわけではありません。ちょうど日本女性が昔、和服を着ていたようなもので、女性一般の社会慣習として見るべきでしょう。

もちろん、アフガニスタンが男性社会であり、女性にとって厳しい社会であることは間違いありません。しかし、それを即、女性虐待に繋げるのは浅はかです。ある意味では彼らのやり方で保護しているものが、欧米風に見ると虐待と映るに過ぎない。無論、アフガンの女性に、自分たちが虐待されているという意識はありません。ついでに言えば、「アメリカなんかはブルカのことを言われる筋合いはない」。これがアフガン女性の感覚でしょう。

私の見るところ、あの強固な伝統社会を底辺から支えている最も強力なパワーは、女性です。ともすれば妥協しがちなアフガン男性の尻を、「あんた、それでも男か」と叩いているのがアフガン女性。どこの村でも見られる光景です。抑圧されているようで、実はアフガン社会をコントロールしているのは女性のほうではないかと思えます。

しかし、一部の西欧化した知的特権階級が女性差別を訴えているのも事実です。西欧文化の恩恵を受け、国連やNGO（非政府組織）の職員となったアフガン女性たちが、こうした慣習に当

然反発し、国外へ脱出した。「タリバン」悪」を国外で喧伝する彼女たちの声だけが、世界のマスコミにフォーカスされ独り歩きしている、というのが私の見方です。

もともとアフガン人の反英米感情は相当に根深いものがあります。

イギリスを敵対視するのは、過去三度にわたるイギリスのアフガン征服戦争に由来します。彼らを三度にわたり撃退した自負心が、現在の誇り高きアフガン人気質をつくっているといえるでしょう。

報復テロ以降、高まっている反米感情についてはもう少し複雑です。

ソ連侵攻時、アメリカはアフガン・ゲリラ組織を、「フリーダム・ファイター（自由の戦士）」として積極的に持ち上げ、てこ入れした経緯があります。その中にはビンラディンなど、アラブ義勇兵たちもいました。ところが、ソ連が崩壊し、目的を果たしたとみるや、アメリカはさっさと引き揚げてしまった。これに対し、「アメリカに利用されただけじゃないか」という敵意が生まれたのは当然です。これは何もアフガニスタンばかりではありません。現在、米国に協力姿勢を示している隣国パキスタンも同様の感情を持っています。

当時アメリカは、冷戦構造の中で、共産勢力に対抗する勢力として、図らずもイスラム主義に支えられたゲリラ支援に回った。それが、同じイスラム主義に対し、今度は敵となって攻撃してくる。フリーダム・ファイターの中身はいったい何なのだ、という反感がアフガン人の中にあるのです。

もっとも現在のアフガニスタンが抱くアメリカに対する極端なまでの敵意は、タリバン以前にさかのぼる話です。彼らの反感は、かつての反大英帝国闘争の伝統として、英米のアフガニスタンへの侵略者（国土を蝕む者、文化侵略者）というイメージが常に底流にある。支援を受けてきたゲリラたちにしても、今はアメリカの力を借りておこうという程度のもので、結局、敵は敵という認識に変わりはありません。

もっとも、過去のカーブル一極近代化政策がクッションとなれば、アフガニスタンに西欧型グローバリズムを受け入れる素地がないとはいえませんが、だが、自国の文化を否定して、力ずくで西欧化を押し付けてくることに彼らの反発があるのです。

資本主義の対立軸だった共産主義が世界的に崩壊した後、貧民を代弁するイデオロギーとして共産主義に代わるものは生まれていません。また生まれようもない。となれば、貧者にしてみればコーランの中にそれを求めるしかないのです。実際に、ある程度、アフガニスタンでそれを代弁しているのがイスラム原理主義です。ひと昔前の西洋、あるいは日本ならば、共産主義者になっっている人たちが、ファンダメンタリスト（原理主義者）としてイスラム原理主義を掲げたのです。

しかもアフガニスタンは他の地域で行われたような近代化の手続きを踏んでいません。いわば各地域が割拠する中世社会のままです。そこに厳格なイスラム原理主義を掲げたタリバンが登場した。彼らはそれなりのイデオロギー的解決策を持っていました。一部の地域では大地主が逃げ

出し階級差別のなくなっていた農村社会で、彼らは一種の平等主義的な政策をも執行したのです。そこには、ユニバーサルイズムという擬似近代的思想も含んでいた。それゆえに、アフガン民衆はタリバンを支持したわけです。これがアフガニスタン・タリバン政権の現実です。

今の世界的潮流の中では、タリバン政権はいずれ潰れる運命にあるでしょう。グローバリゼーションの流れは、少しずつ農村社会の分解を促進していくでしょう。しかし、その前に、相当な徹底抗戦が繰り広げられることは避けられません。もつとも、アフガニスタンが今、経験している混乱は、違った形でやがて周辺諸国にまで及ぶでしょう。そのひとつの要因が「旱魃」^{かんばつ}「砂漠化」です。地球温暖化によって、乾燥地帯を潤してきたヒンズークッシュやカラコルム山脈の雪が消えつつあります。今、アフガン農民の居住空間そのものが、物理的に消滅しつつある。これは戦争よりも恐ろしいことです。アフガニスタンから約一千万人の人口がたたき出されたらどうなるか。農村社会が破綻した末の国民総難民化が、現にアフガニスタンで起こる兆しがあるのです。

こうしたアフガニスタンの現実、西欧グローバリゼーションと真つ向から対立するものです。不必要に消費／生産を繰り返さなければ生き延びられない西欧グローバリズムの構造が、自然の復讐として、アフガニスタンに旱魃をもたらしているという現実を忘れてはなりません。

アフガニスタンを発火点として波及する混乱は、世界的に何かを訴えるものになるはずで、究極はグローバリゼーションの崩壊が起こる可能性さえ秘めている。西欧主導のグローバリズム

が生み出した歪みを、本能的に知っているのは、字も読めないアフガニスタンの一般民衆なのか
もしれません。

(2001・12)

自衛隊派遣は有害無益

国会衆議院テロ対策特別委員会での参考人発言（冒頭部分）

皆様、ご苦労さまです。中村と申します。

もう現地に行きまして約一七年半になりますが、失礼ですけれども私には、日本国内で何が起きているのか実はよくわかりません。ただ、向こうから戻りまして、余りに現実を踏まえない図式に基づいた議論だけが先行し、本当にアフガニスタンの実状を知って話が進んでおるのだろうか、率直な疑問を持つわけでございます。

私は、全くの政治音痴でして、左も右もわからないという中で、先ほど忌憚きたんのない意見ということをおっしゃいましたので、忌憚きたんのない意見を述べたいと思います。

ただその際に、日本全体がもうテロ対策、アメリカを守るためにどうするんだ、タリバンとい

うのは悪いやつだという図式で動いておりますので、あたかもこれを庇^{かば}うような発言をいたしますと、すぐ烙印を押されまして、タリバン派だと言われる。断っておきますが、私は、タリバンの回し者ではありません。それからイスラム教徒ではありません。キリスト教徒でございます。憲法がどうか、そういう法律のことはよくわかりませんので、ともかく今、現地で何が起きているのか、何が問題なのかという事実を皆さんに伝えたいと思っております。どうもイメージと違うという点がございましたら、後でご質問いただければと思います。

まず、私たちの活動を簡単に紹介いたします。ペシャワール会是一九八三年にできまして、一八年半、現地で医療活動が続けてきました。現在、パキスタン北西辺境州の国境の町ペシャワールを拠点にいたしまして、一病院と一〇ヶ所の診療所があり、年間二〇万名前後の診療を行っております。現地職員が約二二〇名で、日本人ワーカーが七名、七〇床のPMS（ペシャワール会医療サービス）病院を基地に、パキスタン北部山岳地帯に二つの診療所、アフガニスタン国内に八つの診療所を運営、国境を越えた活動を行っております。

私たちが目指すのは、山村部無医地区の診療体制の確立。ハンセン病根絶を柱にいたしまして、貧民層を対象に診療を行うことでありますが、後で申し上げますように、今回の早魃^{かんばつ}対策の一環として、今年の春より、無医地区となりましたカールに五ヶ所の診療所を開設し、今でも継続しております。

この間、ご記憶のように、一九七九年一二月に旧ソ連軍の侵攻がありまして、一〇万の大軍が

侵攻、以後何と二二年間、アフガニスタンは内戦の余韻を引きずってきたわけでございます。この内戦で、死亡した戦闘員あるいは外傷による戦死者だけで七五万名、恐らく民間人を入れますと二〇〇万名。これは私自身が目撃者として証言しますが、死んだのはほとんど、子供、女性、お年寄り、戦闘とは関係ない人々であつたわけです。六〇〇万名の難民が出て、それに加えて今度の大旱魃、そして報復爆撃という中で、もう痛めに痛めつけられて現在に至っております。

先ほど申しましたように、アフガニスタンを襲いました世紀の大旱魃——大袈裟なように聞こえますが、これは本当に危機的な状況でございまして、私たちの活動もこれで終わるかもしれない、アフガニスタンの半分はこれで砂漠化して壊滅するかもしれないと、昨年（二〇〇〇年）から必死の思いで水源確保に取り組んできたわけでございます。

WHO（世界保健機関）や国連機関は、二〇〇〇年春からこのことについて警告を発しつつけておりましたが、国際的に大きな関心をひかなかつた。もちろんこれは、テロ事件などと違い、政治的にも意味合いが違いますし、慢性的に起こるものですからなかなか関心をひかなかつた。

アフガニスタンが一番ひどくて、被災者が一二〇〇万人、四〇〇〇万人が飢餓線上にあり、一〇〇万人が餓死するであろうという発表がありましたのは、約一年半前でございました。もちろん人命の尊さというのは、数で計れるものではありません。けれども、我々簡単に一〇〇万人が餓死するだとか言いますが、実際に修羅場を目の当たりにしますと——先ほど映像で見る状態と実際に現場で見る状態は違うんだ、もっと生々しいものなんだとおっしゃいましたが、まさにそ

のとおりでありまして、決して生易しいものではない。食糧だけではなくて飲料水が欠乏して、次々と廃村が広がっていくという事態が起きたわけでございます。下痢や、簡単な病気で主に子供たちが次々と命を落としていきました。

私たちとしては、この事実をみんなに訴えながら、言うだけではだめですから、真っ正面から組織を挙げて対策に取り組んできました。医者がこんなことを言っちゃいけませんけれども、病気なんかは後で治せる、まず生きておれという状態でございまして、診療所を中心にして、アフガニスタン東部一帯の旱魃地帯に速やかに水源確保事業を展開いたしました。食べ物は何遇間か生きていられますが、水がないと二四時間以上生きられない。そういう状態であつたわけです。

現在まで約六六〇ほどの水源に取り組んで、そのうち五五〇ヶ所で利用水源を得ております。

中には、一旦難民化して人がいなくなつて砂漠化した村が、水路——現地にカレーズと呼ばれる伝統的な地下水路があります——を三〇本復活して、一万余千名を養えるだけの緑地を回復した。それで村人が戻ってくるという奇跡的なことも起きたわけでございます。

今年、私たちも初めのうち、「エチオピア飢饉以上の規模である、我々が頑張っていれば必ず国際的に大きな援助が来るんだ、こんなのをだれも放置しておかないだろう」と思っていました。が、やってきたのは一月の国連制裁でございました。ただでさえ少なかつた外国の救援団体が次々と撤退していくという中で、まさにアフガニスタンは孤立化への道を深めていったわけでご

ざいます。

カーブルには、もとの裕福なカーブル市民というのは二割、三割程度しか残っていない。あとは、先ほど申しました旱魃により逃れてきた国内難民であふれておる状態でございます、現在、一〇〇万人から一五〇万人、この約一割が今年の冬を生きて越せないだろう、この約三割から四割が慢性の飢餓状態で、簡単な病気で死んでいくという状態でございます。

誰もやらないなら、ニーズがあつて誰もやらないのなら我々が行く、「我も我も」と行くところなら行く必要がないというのが我々の方針で、緊急に今年の二月から（正式には三月から）カーブルに診療所を開設したわけでございます。

これでもまだ不十分だと、水源の目標数を今年以内に一千ヶ所、カーブル診療所を年内に一挙に一〇ヶ所にしろということでお膳立てをしている最中に、九月一日の同時多発テロになり、私たちの事業は一時的にストップいたしました。初めのショックから立ち直つて、今、拡大こそしていませんが、今までやってきた事業は、爆撃下にながらも、勇敢なスタッフたちの協力によりまして、何事もなかったかのように継続しております。

難民についての議論が先ほどからございますけれども、今、私たちが恐れておるのは、カーブルの——ほかの都市もそうですが——飢餓です。飢餓であります。現地は今から寒い時期に入ってくる。市民は越冬の段階に入ってきておる。今支援をしなければ、今年の冬、先ほど申しましたように約一割の市民が餓死するであろうというふうに思われます。このため、私たちは、

緊急の炊き出しとでも申しますか、食糧配給を開始いたしました。既にその準備は完了いたしました。

現地における私たちとしては、ぜひ訴えたいのは、難民が出てからでは、これは手間もかかるし金もかかるというだけではなくて、悲劇が大きくなる、難民を出さない努力というのをまずやらずに、なくちゃいけないということでございます。

ペシャワール側で見えていますと——これは日本側に帰っても驚きましたけれども——難民が出てくるのを待っておる。ペシャワールには現在百数十のNGO（非政府組織）が集結しております。まして、難民が出たらこうしよう、ああしようと言っているけれども、実際の、いわゆる我々が想像するような難民は今のところ発生しておりません。人々は難民にすらない状況にあるのです。私たちは、飢餓による難民は一人もペシャワールに出さないという決意で、全力を挙げて現在の仕事をやっていくつもりでございます。

話が長くなりましたけれども、難民援助に関しましても、こういう現実を踏まえて議論が進んでおるのかということに、一日本国民として一つの危惧を抱くわけでございます。

例えば、いろいろ考え方はありますけれども、テロという暴力手段を防止する道に関しまして、これは暴力に対しては力で抑え込まないとだめだということが何か自明の理のように議論されておる。私たち、現地におりまして、対日感情、日本に対する信頼というのは絶大なものがあるのです。それが、軍事行為、報復に参加することによって損なわれる可能性があります。

アフリカだとか南アメリカは私はよく知りませんが、現地に即して言いますと、例えば「難民支援」やNGOの保護と称して自衛隊派遣が今取りざたされておるようではありますが、有害無益でございます。かえって私たちの信頼を損なうということははっきり言える。

笑っている方もおられますけれども、私たちが必死でとどめておる数十万の人々、これを本当に守ってくれるのはだれか。私たちが十数年間かけて営々と築いてきた日本に対する信頼感が、現実をふまえないディスカッションによって、軍事的プレゼンスによって一挙に崩れ去るということはあり得るわけでございます。

要するに言いたいことは、まず現地はどうか、実情はどうかということを踏まえた上で何かを決める。私は日本国民の一人として法律に従いますけれども、アフガニスタンに限りは、充分な情報が伝わっていない。土俵の設定がそもそも観念的、密室の中で進行しておるというのが、偽らざる感想でございます。

私ばかり話していると後の方が話す時間がありませんので、一応ここで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(2001・10・13)

*中村医師の発言に対して終始ヤジを飛ばしていた自民党の代議士がいた。それが鈴木宗男氏である。ちなみに委員会の委員長は加藤紘一氏だった。